

本報告では、1990年代以降現在までの主要な欧州大陸系銀行グループ、ドイツ銀行、スイスのUBS(旧スイス銀行、スイスユニオン銀行)、クレディスイス・グループの経営戦略とその特徴について、その時々々の金融環境、規制動向等を考慮しながら概観したい。

これら欧州主要3行は、いずれも1990年代に入り、大規模な組織変更を断行し、国際投資銀行業務に本格参入した(クレディスイスは他行に先行し、1980年代後半から)。そして、1980年代から業務規制緩和が進むなか、1990年代半ばには強力な商業銀行部門、投資銀行部門を擁するハイブリッドな金融グループとして、ウォール街でもその動向は大いに注目を集めるようになっていた。また、1990年代後半から2000年代初めにかけては、いずれも米国の有力投資銀行業者を買収するに至った。報告前半には、1990年代までの各グループの当該業務参入の経緯や大規模な組織変更等による業務体制整備について概観する。

2000年代に入り、各グループはほぼフルラインの国際投資銀行業務を拡充、例えばドイツ銀行は、1998年の米有力投資銀行バンカーストラスト(BT)買収後、2000年代半ばにグローバル株式・債券引受業務などで上位を占め、米大手投資銀行に比肩する「リーディング・インベストメントバンクの1つ」との評価を得るまでになった。しかし、2008年秋の金融危機以降の金融規制強化のなか、一転投資銀行業務の縮小を余儀なくされるようになった。自己資本規制やレバレッジ比率規制により、バランスシートを利用するビジネスが困難となった。各行とも自己資本の積み増し、高リスク資産などリスク加重資産(RWA)の削減(自己資本規制対応)、低リスク資産など総リスク・エクスポージャーの削減(レバレッジ規制対応)を進めつつ、①債券・通貨・商品部門(FICC)を中心とする投資銀行業務、トレーディング業務といった高リスク業務の縮小・分離、②資産運用及びウェルスマネジメントへのシフトといった戦略変更が行われた。欧州大手銀行による国際投資銀行業務の縮小は、商業銀行に投資銀行業務を加味する形で新たな金融システムを構築しようとする欧州の政策(例えば、EU 欧州資本同盟)には必ずしも沿うものではなく、また、今後仮に投資銀行市場が好転した場合、欧州各行の収益機会の縮小や米金融機関との競争力低下の可能性が懸念されている。

報告後半では、2000年代を通じた各行の国際投資銀行業務を概観し、金融危機後の規制強化のなか行われた具体的な戦略変更について概観、評価を行う。特に金融危機後に進められた国際金融規制改革は、各行の経営のストレスを高めていることは否定できない。従って、各行の戦略評価を行うことと併せて、国際金融規制改革の銀行経営や金融市場への影響についても触れてみたい。